

平成27年5月28日

No. 15-105

株式会社 いよぎん地域経済研究センター

インバウンドの視点から見た、スポーツツーリズムの可能性

～アクティブツーリストを惹き付ける“スポーツ×観光”のすすめ～

株式会社いよぎん地域経済研究センター（略称IRC、社長 山崎 正人）では、このたび下記のとおり、県内の交流人口拡大（特にインバウンド強化）に向けた、スポーツツーリズムの可能性について取りまとめましたので、お知らせいたします。

なお、詳細は2015年6月1日発行の「IRC Monthly」2015年6月号に掲載いたします。

記

【調査要旨】

- ・ 2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定したこともあり、スポーツで旅を楽しむ、もしくは旅でスポーツを楽しむ「スポーツツーリズム」が注目されている。
- ・ また、その前後にも世界的なスポーツ大会が開催され、国内外から観戦や参加を目的とした観光客（以下、アクティブツーリスト）の増加が期待される。
- ・ これら世界的スポーツ大会に先立ち、愛媛では第72回国民体育大会「愛顔つなぐえひめ国体」が開催され、スポーツに対する県民の意識が高まるほか、国体に向けて各種施設が整備されることから、合宿やアクティブツーリストの誘致によるインバウンド強化に期待がかかる。
- ・ 現在のところ、愛媛県や県内各市町には、スポーツツーリズムを謳った施策は見られないが、愛媛県が取り組んでいる観光へのスポーツの活用として、サイクリングがある。合宿や大会の誘致にも成功しており、こうした誘致を観光に結び付けていくことが、今後の課題である。
- ・ 愛媛におけるスポーツツーリズムの推進に向けては、「長期的な視点に立った方針の明示」「スポーツ大会に向けた戦略的な取り組み」「各種資源を生かしたスポーツツーリズムによるインバウンド強化」「スポーツコミッションの設立と地域をプロデュースできる人材の育成」が重要である。
- ・ 各地方自治体においてもスポーツと観光の融合への取り組みはこれからと考えられる。愛媛国体開催に向け、準備が進む今だからこそ、自治体や関連団体が連携・協働し、スポーツツーリズムをインバウンド強化、交流人口拡大の柱として、取り組む必要があるのではないだろうか。

以上

はじめに

日本を訪れる外国人の数は、2014年には過去最高を記録したが、四国、愛媛を訪れる外国人の数は全国でも下位にある。

愛媛県は、豊かな自然環境と温暖な気候に恵まれ、サイクリングやキャニオニングなど、年間を通してさまざまなスポーツを楽しむことができる。

そこで、愛媛におけるスポーツツーリズムの可能性について、インバウンドを中心とした交流人口拡大の視点から取りまとめた。

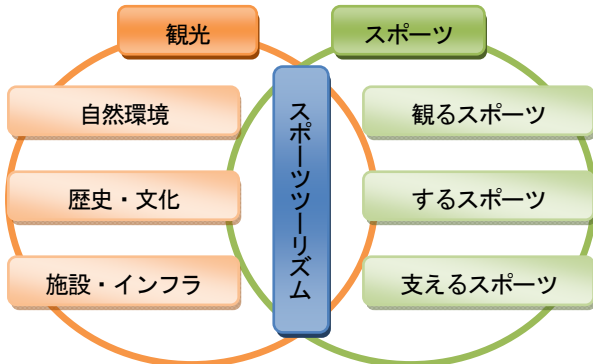
1. スポーツツーリズムについて

スポーツツーリズムとは、「スポーツで旅を楽しむ」「旅でスポーツを楽しむ」といったように、これまで別々の概念として捉えられてきたスポーツと観光を融合させ、新たな価値や感動を提供するものである。

スポーツは、試合などを観戦する“観るスポーツ”と、自らが参加する“するスポーツ”に大きく分けられる。また近年は、選手を応援する市民やボランティア、大会を運営する地域や行政、企業などとの交流である“支えるスポーツ”の役割も重要になっている。

スポーツツーリズムは、これらスポーツに関わる旅行そのものや周辺観光を加えたもので、地域の活性化につながる事が期待されている。

図表-1 スポーツツーリズムの概念図



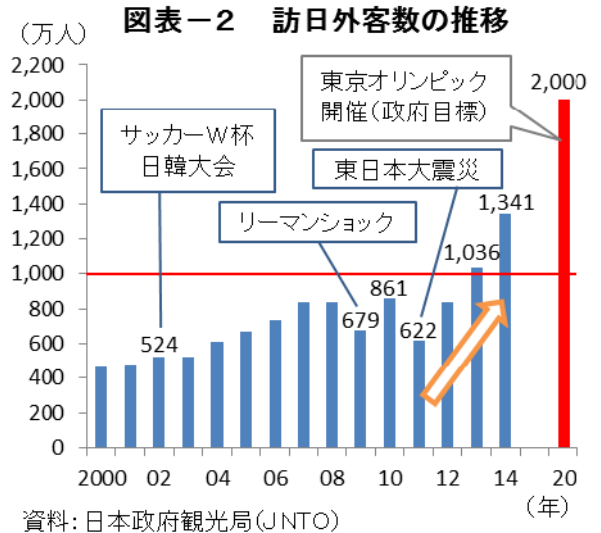
2. インバウンドの現状と課題

(1) インバウンドの現状

日本を訪れる外国人の数は増加しており、2014年は1,341万人と過去最高を記録した。さらに政府は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京オリンピック）が開催される20年に2,000万人の目

標を掲げており、スポーツツーリズムは目標達成に大きく貢献することが期待されている（図表-2）。

なお、14年に愛媛に宿泊した外国人の延べ人数は、6.5万人泊（前年比▲2.5%）で、全国38位と低迷している。（図表-3）。



図表-3 外国人延べ宿泊者数都道府県ランキング(2014年)(単位:万人泊)

順位	都道府県	延べ宿泊者数	順位	都道府県	延べ宿泊者数
1	東京都	1,345.3	26	香川県	15.2
2	大阪府	583.8
3	北海道	403.5	38	愛媛県	6.5
4	京都府	340.9
5	千葉県	275.0	44	高知県	3.8
...	45	徳島県	3.6
17	広島県	44.1	46	福井県	3.1
...	47	島根県	2.8

資料：観光庁「宿泊旅行統計」

(2) インバウンド強化に向けた愛媛の課題

愛媛を訪れる外国人を増やすには、地域が連携して魅力を高める必要があり、①県内の市町連携、②四国内での連携、③広島県との連携などが考えられる。

また連携して高めた魅力を、誰に、どのように発信するかも重要な課題である。こうした広域連携や情報発信に際し、テーマの統一を図るうえで、スポーツツーリズムは解決策の1つとなりうる。

(3) スポーツツーリズムの可能性

2020年の東京オリンピックの前々年の18年には、韓国の平昌においてオリンピック・パラリンピック冬

季大会が、19年にはラグビーワールドカップ2019日本開催が、そして21年にはワールドマスターズゲームズ 関西大会が開催される。

これらのスポーツ大会では、スポーツやアクティビティに興味を持つ観光客（以下、アクティブツーリスト）が、観戦や参加を目的として試合会場周辺に集まるため、特に外国人アクティブツーリストによる国内観光需要の高まりが期待される。

愛媛では、これらの世界的なスポーツ大会に先立ち、17年に第72回国民体育大会「愛顔つなぐえひめ国体」（以下、愛媛国体）が開催される。スポーツに対する県民の意識が高まるほか、国体に向けて各種施設が整備されることから、その後のスポーツ大会や関連する合宿、観光客の誘致に期待がかかる。

3. インバウンドの視点から見たスポーツツーリズムへの取り組み

（1）日本におけるスポーツツーリズムへの取り組みとスポーツコミッション

2012年に設立された「一般社団法人 日本スポーツツーリズム推進機構」は、スポーツツーリズムの普及・定着を図るため、地域におけるプラットフォーム形成の支援を行っており、近年、各地で「スポーツコミッション」が設立されている。

スポーツコミッションには、地域の視点で次のような機能を持ち、力を発揮することが期待される。

- ① 県境や市町村境を越えて、自治体、関係団体、民間企業、住民等の利害を調整し、連携させていく機能
- ② スポーツ資源と観光資源をスポーツツーリズムのプログラムとして着地型観光商品に仕立て販売する機能
- ③ アクティブツーリストへの情報提供、参加申込や決済、交通・宿泊の手配、体験プログラムなどをワンストップで提供できる総合窓口機能
- ④ スポーツ振興による多面的な地域づくりを進めていく機能

（2）愛媛におけるスポーツツーリズムへの取り組み

愛媛では、2014年、女子野球ワールドカップ日本代

表「マドンナジャパン」の直前合宿のほか、オープンウォータースイミングの合宿兼日本代表予備選考会や、サイクリングチーム「チームUKYO」の合宿などを誘致した。大会誘致では、毎年「全日本女子硬式野球選手権大会」が松山のマドンナスタジアムで開催されているほか、過去には女子野球ワールドカップや世界少年野球大会など世界的な野球イベントの誘致にも成功している。

こうした誘致を観光に結びつけていくことが、今後の課題である。

4. 愛媛におけるスポーツツーリズムの可能性

（1）推進体制

愛媛県では、文化・スポーツ振興課がスポーツ振興関連全般の業務を、そして国際交流課がインバウンド推進などを主な業務として取り組んでいるが、現行の組織体制ではスポーツツーリズム推進に十分には対応できていない。各市町でも、概して同様の状況である。

こうしたなか、愛媛県では、自転車施策を総合的に企画、調整および推進し、自転車新文化を普及・拡大する組織として「自転車新文化推進室」を設置した。組織横断的に自転車施策を展開することで、より効率的かつ効果的に自転車を通じた地域活性化を実現することを目指している。

（2）愛媛国体開催による施設整備

各種スポーツイベントや合宿などの誘致を推進するために、最も重要なのは「ハード面」である。県内では、国体基準の施設の整備が進んでいるため、今後、スポーツイベントや合宿などの誘致が増加する可能性はある。

（3）愛媛におけるスポーツ資源と観光資源の整理

スポーツ資源と観光資源を融合させる際に強みとなるのは、“魅力ある自然環境や施設・インフラ、歴史・文化に裏付けされた資源”である。

愛媛県の主要な資源について整理すると、スポーツ資源としては、しまなみ海道を中心としたサイクリングや正岡子規にはじまる野球のほか、全国的にも評価の高い愛媛マラソンも可能性がある。観光資源として

は、四国八十八カ所や道後温泉などがあげられる。

5. 愛媛におけるスポーツツーリズム推進に向けて

(1) 長期的な視点に立った方針の明示

愛媛県のスポーツ振興の基礎となる「後期愛媛県スポーツ振興計画」は、2017年に開催される愛媛国体に向けたものとなっており、東京オリンピックに向けた取り組みなどは記載されていない。愛媛国体だけに捉われることなく、世界的なスポーツ大会開催という機会を逃さない、戦略的な計画が求められる。

(2) スポーツ大会に向けた戦略的な取り組み

世界的なスポーツイベントに対しては、大会の前年や直前に実施される合宿などの誘致ができれば理想的である。どの種目でどの国をターゲットに合宿誘致するかを検討する際には、オリンピック以降も交流が継続・発展することを基準に考える必要がある。

合宿の誘致が実現しなかったとしても、大会の観戦などの目的で日本を訪れるアクティブツーリストの観光需要の取り込みを図ることは十分可能であり、この需要を取り込む準備を入念に行うことが重要であり、より現実的である。

(3) 各種資源を生かしたスポーツツーリズムによるインバウンド強化

A. 道後温泉とのコラボレーション

愛媛には、日本最古の温泉と言われる「道後温泉」がある。スポーツと組み合わせることで、愛媛は「スポーツやアクティビティを存分に楽しむことができ、疲れた身体をゆっくりと癒すことができる」場所というイメージをつくっていくことが重要である。

B. 四国遍路とのコラボレーション

日本遺産に選ばれた「四国八十八カ所霊場巡り」も愛媛にとって重要な資源である。そして自転車でそれらを巡る自転車遍路は、四国4県で連携が可能なスポーツツーリズムの1つである。

まずは、市町単位など限られたエリアで、1日で行けることのできるコースを設定し、どこからでも巡礼できる仕組みを構築することが必要である。

C. しまなみ海道サイクリングの活用

アクティブツーリストを愛媛に呼び込むためには、しまなみ海道のサイクリングの活用も重要である。

県内全域に広がる「愛媛マルゴト自転車道」は、各コースとも市域、町域をまたいでおり、各市町がしまなみ海道を中心に広域連携することで、相乗効果を得ることができる。また、しまなみ海道でつながっている広島県には、年間80万人を超える外国人観光客が訪れており、今後、インバウンドを強化するにあたっては、広島県との連携も重要となる。

(4) スポーツコミッションの設立と地域をプロデュースできる人材の育成

スポーツツーリズムの推進には、戦略の立案や実行の中核を担う組織が必要であり、自治体では対応しきれない分野を補うためには、民間のスポーツコミッションのような専門組織が必要である。さらに地域が持続的に発展していくためには、地域をプロデュースできる人材を育成し続ける必要がある。

そこで、大学内にも学生が中心となってスポーツツーリズムについて研究・提言する組織を設立し、自治体やスポーツ・観光に関連する団体、企業等と連携を図りながら、イベントなどの企画、運営やその補佐をすることで、地域活性化と人材育成を同時に進めていくことが可能となるのではないだろうか。

おわりに

2018年以降の世界的スポーツイベントを地域のインバウンド強化に生かしていくには、他地域に先駆けて取り組むことが重要である。また各種施設や体制の整備が進むことで、結果的にインバウンドだけでなく国内の需要にも応えられるようになる。

17年の愛媛国体開催に向け、準備が進む今だからこそ、スポーツと観光の垣根を越えて自治体や各種団体が連携・協働し、スポーツツーリズムをインバウンド強化、交流人口拡大の柱の1つと位置づけ、ソフト・ハード両面での対応に、早急に取り組む必要があるのではないだろうか。

(宮内 雅史)